Shinano Male Choir

創価学会しなの合唱団
第31回定期演奏会



萌芽
— 一人立つ勇気の種 —

会場 大田区民ホール
アプリコ 大ホール
入場無料 ※要入場券（全席指定）

日時 2025年4月6日㊐
15時00分開演（14時15分開場）

主催：創価学会しなの合唱団　　後援：JCDA 日本合唱指揮者協会／東京都合唱連盟

ごあいさつ

Message

本日は、第31回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

創価学会音楽隊は、日頃より応援してくださる皆様のおかげで、昨年、結成70周年の佳節を迎えることができました。そして来月には、指針『音楽隊ありて創価の凱歌あり』を、創立者である師匠・池田大作先生より託されて10年の節目を迎えます。池田先生は指針の中で、「音楽には、国土・社会を変え、時代を動かし、未来をよりよく創りゆくエネルギーが秘められている」「音楽芸術は、苦闘する人を励ます生命の炎である。心は心でしか、温めることはできない。なかんずく、真摯に向上しゆく青年の楽音は、絶望の闇に震える友を蘇らせる光となり、熱となる」と音楽に限りない期待を寄せています。その理念のもと、創価学会音楽隊では吹奏楽を中心に管弦楽、マーチング、軽音楽、和太鼓、合唱など、国内外の100以上の楽団が、各種コンクールやイベントへの出演をはじめ、日本各地での激甚災害からの心の復興に向けた「希望の絆」コンサートの開催等、幅広く活動を行っております。

創価学会しなの合唱団は、第31回定期演奏会のテーマを「萌芽(ほうが)～一人立つ勇気の種～」とし、熊倉実行委員長を中心に準備を進めてまいりました。開催地である大田区は、池田先生の生まれた地です。空襲の恐怖、長兄の戦死、悲しむ母の慟哭(どうこく)――悲惨な第二次世界大戦の中、この地で過ごした幼少期は、池田先生の平和行動の原点となりました。また1947年8月14日、後の師となる戸田城聖先生と出会ったのも、大田区で行われた創価学会の座談会でした。そして10日後に入信を果たした池田先生の平和行動で192カ国地域での広がりを見せる創価学会インタナショナルは、本年、発足より50周年を迎えました。師匠の平和行動の萌芽の地で、私たちも平和を願い、歌わせていただきます。どうぞお楽しみください。

創価学会しなの合唱団　団長　細田英輝

Shinano Male Choir



1st Stage

指揮：笹口圭吾／ピアノ：前田勝則

男声合唱とピアノのための組曲「音楽家の友への五つの詩」から

作詩：黒田喜夫／作曲：信長貴富

Ⅳ. ギター弾きへの告別
Ⅴ. ながいながい曲の終りにただ一度立ち上がって
シンバルを叩いた人に幸あれ

2nd Stage

指揮：笹口圭吾

男声合唱組曲「富士山」

作詩：草野心平／作曲：多田武彦

Ⅰ. 作品第壹
Ⅱ. 作品第肆
Ⅲ. 作品第拾陸
Ⅳ. 作品第拾捌
Ⅴ. 作品第貳拾壹

Intermission

3rd Stage

指揮：小川正明／ピアノ：山尾正之

萌芽
～ 一人立つ勇気の種 ～

「厚田村」
作詞：山本伸一／作曲：杉野泰彦

「森ヶ崎海岸」
作詞：山本伸一／作曲：本田隆美

「青年よ広布の山を登れ」
作詞：山本伸一／作曲：甲斐正人

4th Stage

指揮：清水敬一／ピアノ：前田勝則

男声合唱とピアノのための「新しい歌」

作曲：信長貴富

Ⅰ. 新しい歌
作詩：フェデリコ・ガルシア・ ロルカ／訳詩：長谷川四郎

Ⅱ. うたを うたう とき
作詩：まど・みちお

Ⅲ. きみ歌えよ
作詩：谷川俊太郎

Ⅳ. 鎮魂歌へのリクエスト
作詩：ラングストン・ヒューズ／訳詩：木島 始

Ⅴ. 一詩人の最後の歌
作詩：ハンス・クリスチャン・アンデルセン／訳詩：山室 静



清水敬一（しみず けいいち）［指揮者］ Conductor

1959年5月東京生まれ。1982年3月早稲田大学理工学部電気工学科卒業。 指揮法を遠藤雅古、V.Feldbrill、合唱指揮を関屋晋の各氏に師事。 現在十数の合唱団の指揮を任される。各地で合唱とオーケストラのための作品のコーラスマスターを務める一方、初演した現代作品も数多い。国内外の音楽祭・作曲コンクール・合唱コンクールの審査員を歴任。現在、JCDA日本合唱指揮者協会理事及び全日本合唱連盟理事、東京芸術大学附属音楽高等学校講師。著書に『合唱指導テクニック』（NHK出版）、『合唱指揮者という生き方　私が見た「折々の美景」』（アルテスパブリッシング）。

笹口圭吾（ささぐち けいご）［指揮者］ Conductor



大東文化大学文学部卒業。洗足学園音楽大学附属指揮研究所修了。指揮法を秋山和慶・河地良智、ピアノを島田玲子、橋本智紗、合唱指揮を清水敬一・清水昭の各氏に師事。関東各地で18合唱団の常任指揮者を任される。創価学会しなの合唱団を指揮し、全日本合唱コンクール全国大会にて度重なる金賞ならびに特別賞を受賞。江東少年少女合唱団を率いてオーケストラとの共演多数。同団の長年の指導により、江東区文化振興財団功労賞受賞。一般社団法人民主音楽協会主催「はじめての合唱指揮ワークショップ」をはじめ、各地の講習会や合唱祭の講師を務める。江東区文化センター講師、一般社団法人日本合唱指揮者協会理事ならびに事務局長。



前田勝則（まえだ かつのり）［ピアニスト］ Pianist

山口県に生まれる。1998年東京学芸大学教育学部芸術課程音楽専攻卒業。2001年東京芸術大学大学院音楽研究科修了、修了時にNTTドコモ奨学金を授与される。ピティナ・ピアノコンペティションデュオ部門特級最優秀賞受賞をはじめとして、多摩フレッシュ音楽コンクール、日本室内楽コンクール、吹田音楽コンクール、大曲新人音楽祭コンクール、かずさアカデミア音楽コンクールなどに上位入賞。また、NHK-FM「土曜リサイタル」、東京文化会館新進音楽家デビューコンサート、ABCフレッシュ・コンサート、日演連推薦／新人演奏会など、多くの演奏会に出演。大阪フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉と協演。これまでに、佐川愛子、徳万良子、石橋史生、植田克己の各氏に師事。現在、ソロ、室内楽、及び声楽・合唱のピアニストとして活発な演奏活動を繰り広げている。

Profile



小貫岩夫（おぬきいわお）［ヴォイストレーナー］*Voice Trainer*

同志社大学卒業後、大阪音楽大学卒業。同志社時代は同志社グリークラブに所属しソリストとして一時代を築いた。音大在学中の95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演しデビュー。この成功により翌年、ケムニッツ市立歌劇場（ドイツ）に招聘出演し、二期会、新国立劇場を中心に活躍。07/10年二期会「魔笛」タミーノ役（実相寺昭雄演出）、11年佐渡裕プロデュース「こうもり」アルフレード役などで喝采を浴びた。近年は立て続けに二期会のオペレッタで主役を歌い、なくてはならない存在となっている。コンサートでも、主演オケとの共演で高い評価を得ている他、テレビ・ラジオにも度々出演。2010年から毎年、東京と大阪でリサイタルを開催し好評を得ている。2013年上皇上皇后両陛下御親覧のチャリティボールで演奏し、お言葉を賜る他、フィレンツェではイタリア元首相夫妻主催のコンサートに招かれた。合唱の指導者としても関西学院グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団、立教大学グリークラブ男声、同志社グリークラブ、法政大学アカデミー合唱団などのヴォイストレーナー、大阪外国語大学グリークラブOB（東京）の指揮者として活躍している。二期会会員。東京藝術大学オペラ専攻非常勤講師。



川口紗弥加（かわぐちさやか）［司会］*Master of Ceremonies*

東京都出身、俳優。'23年出演した縦型ショートフィルム『レンタル部下』がカンヌ国際映画祭×Tik Tok Short Filmコンペティションにてグランプリ受賞。'24年に結成した縦型ショートドラマ製作チーム『シバケン』に所属し、縦型ショートドラマに出演する他、映画『ダブル・ライフ』『ほどけそうな、息』、ドラマ『アングリースクワッド EPISODE ZERO』等に出演している。
WEBSITE：https://tomoesayakakawaguchi.com/

1st Stage　男声合唱とピアノのための組曲「音楽家の友への五つの詩」から

作詩：黒田喜夫／作曲：信長貴富

Ⅳ．ギター弾きへの告別

きみの頭のなかのギター
闇のおくの声　きみが
背中を見せて去ってゆくとき
かえって近くなる声
いなくなるきみはきみではない
残された空に走ってゆく弦のひびき
啞のきみが　ゆきずりの
喫茶店で夕方の唄を聴き
それから壁の背中となって夜に遠ざかるとき
残された街路で　飾り窓の
ギターに魅されて立ちつくす無名の人がいる
聴こえるのは足音
うしろに消える足音と短く扉の閉まる音
椅子のきしみ　おお
ながいながい椅子のきしみと
黙ってきみが抱えている青銅の頭のなかのギター
だがいなくなるきみはきみではない
きみはマヤコフスキーの短銃で金属の
苦悩を砕くが
そのとき深すぎる闇のおくから声が近づく
かきたてられたきみの弦がさけぶ

死に生まれるギター弾きよ　SARABA！



敗戦、そして高度経済成長期へ。1950年代、プライドと犠牲の上に、加速度的に経済大国への道を歩み始めた日本では、労働のあり方が見つめ直されていました。そんな秩序と混乱が入り混じる吊り橋のような社会を、鋭角な視点でとらえ、質量のある言葉で叫んだプロレタリア詩人こそ、黒田喜夫です。

黒田は工場労働者を経験し、戦後には郷里・山形の農村にて農民運動に参加。病に蝕まれて退くも、療養しながら詩作を続けました。病弱な体のうちに秘めた果てしない革命の思想と、怒りにも似たコミュニズムが紡ぐ詩の数々には、煮えたぎるようなエネルギーが込められています。

本組曲の各詩に登場する「音楽家」は、決して快活なものではなく、混迷を極める社会から疎外もしくは抑圧された人間の心象のメタファーとして、あるいは詩人自身を映し出す鏡として、圧倒的な存在感を放ちます。それらは、共通の旋律として姿を現し、シーンを象徴するエッセンスとして私たちの耳に語りかけます。

『ギター弾きへの告別』は、あるギター弾きへの告別を叙情的に表現した詩です。ここでのギター弾き、そして“きみ”とは、黒田自身のこと。「背中を見せて去ってゆくとき　かえって近くなる声」「いなくなるきみはきみではない」といった相反する事象からは、激動の時代を生き、革命を謳い、自分自身へと問いかけ続けた黒田の葛藤さえ伺えます。

ギター弾きにとって、ギターは命そのもの。黒田にとっては、それが「思想（＝命）」だったのかも知れません。もはや言葉すら発せなくなったギター弾きは、喫茶店の外窓から覗き、魅せられた名も無き人に、魂を預けます。そうして拾い上げられたギターは、生と死の間に揺れる静寂を切り裂いて、再び、情熱を叫ぶのです。始まりとしての死を、憂いを帯びた疾走感のある音色で奏でます。

Ⅴ. ながいながい曲の終りにただ一度立ち上がって シンバルを叩いた人に幸あれ

また夕暮れと
公園を通り
遠くながい傾斜のおくへ
ぼくは朝の終りより黙りがちに
夜の始まりを降りてゆく
入口に群れる鳥たちに触れず
隣の椅子の見知らない山羊に触れず
ぼくはどんな時より一人なのに
きみは必ずいない
遠くながい傾斜のおくへ
輝かしく虚ろな弦の沙漠が
崩れおちるとき
きみはいない
フルートの眠り
夜をゆく金管の鉛の足音をたどり
幕間から幕間へきみを探す
いやぼくは縛られ
囚人よりも犯され
遠くながい傾斜のおくへ
盲目の百人のオーケストラが
崩れおちるとき
ただ一度だけきみはいる
きみは顔もなく伸ばされた手だ
そのとき苦しい虹のかげから必ず
小柄な人が立ち上がり
躰より大きなシンバルを叩くのを見る
ただ一度の生の音が
崩れおちる交響曲を断ち切るのを聴く

『詩と反詩〈黒田喜夫全詩集・全評論集〉』（頸草書房）所収

※詩の中に差別的表現と解釈されうる単語が存在しますが、詩の書かれた時代を考慮し、また詩に差別を助長する意図がないことに鑑み、原詩のまま掲載しています。
※作曲上、詩を省略・変更している箇所があります。

人生の終曲、まさに“フィナーレ”を飾るにふさわしい、どこか寂しげで壮大な詩。黒田は、幾度の自問自答を繰り返した末に、自分の生きる意味や思想の終着点を見出したのでしょう。

“ぼく”は、黄昏時の仄明るい空を背に、閑散とした公園が隔てる夜の帷、つまり孤独と虚無に覆われた夢の世界へと落ちていきます。“ぼく”は思慮を巡らせ、脳裏に焼き付く“きみ”（＝理想の実現に燃えていた頃の自分）の存在と、オーケストラのように整ったシュプレヒコールの音色を探します。しかし、記憶を呼び起こすほどに、自身に巻きついた不自由な鉄鎖の締め付けは強くなる。奏者あるいは群衆が一人、また一人と離れ、絶望の淵に沈みかけたその時、あの燃えていた頃の自分が温かい手を差し伸べ、自己を肯定してくれるのです。「これでよかった」、黒田はそう実感して、深い眠りに落ちたのかも知れません。

疎外あるいは抑圧された音楽家が抱く微かな希望を、ドラマティックに移り変わる合奏でお届けします。詩人・黒田喜夫がのこした、世相への警鐘にも似た鮮烈な詩が、心の奥底に響くことを願って――。

プログラムノート執筆：谷 拓宣

2nd Stage

男声合唱組曲「富士山」

作詩：草野心平／作曲：多田武彦

Ⅰ．作品第壹

麓には桃や桜や杏さき
むらがる花花に蝶は舞ひ
億萬萬の蝶は舞ひ
七色(なないろ)の霞たなびく

　夢みるわたくしの
　富士の祭典

ぐるりいちめん花はさき
ぐるりいちめん蝶は舞ひ
昔からの楽器のすべては鳴り出すのだ
種蒔(たねま)きのように鳥はあつまり
日本のすべての鳥はあつまり
楽器といっしょに歌っている

　夢みるわたくしの
　富士の祭典

七色の霞は雪に映え
七色の陽炎(かげらふ)になってゆらゆらする
鹿や猪や熊や馬
人はゐないか人もゐるゐる
へうたんの酒や女の舞ひ
標野(しめぬ)の人も歌っている

　ああ
　夢みるわたくしの
　富士の祭典

遠く大雪嶺(だいせつれい)からは黄鳥(くわう)が
使者になって花を啣(くわ)へて渡ってくる
三つの海を渡ってくる

Ⅱ．作品第肆

川面(かはづら)に春の光はまぶしく溢れ
そよ風が吹けば光たちの鬼ごっこ
葦の葉のささやき
行行子(よしきり)は鳴く
行行子の舌にも春のひかり
土提(どてい)の下のうまごやしの原に
自分の顔は両掌(りやうて)のなかに
ふりそそぐ春の光に
却(かへ)って物憂(ものう)く眺めてゐた

少女たちはうまごやしの花を摘んでは
巧みな手さばきで花環をつくる
それをなはにして縄跳びをする
花環が圓を描くとそのなかに
富士がはひる
その度(たび)に富士は近づき　とほくに座る

耳には行行子
頬にはひかり

Ⅰ.作品第壹
蛙の詩で知られる詩人・草野心平は、富士山に魅了され、富士山を題材とした作品も数多く残しました。
草野は1940年、日中文化の橋渡し役を期待され、中国に渡ります。日本を離れ、異国の地から富士山を思うことで、その存在の大きさと美しさをより深く感じるようになります。草野は、富士山を「一つの美と存在の象徴」として捉え、生涯を通じて詩や絵画、書などでその魅力を表現し続けました。

『作品第壹』では、富士山の麓に広がる壮大な自然と、そこで繰り広げられる幻想的な祭典を描いています。桃や桜、杏の花々に、無数の蝶と、まさに楽園のようです。しかし「夢みるわたくしの 富士の祭典」というフレーズが幻想的な調べとともに現れることで、この光景が単なる風景描写ではなく、作者の思い描く理想郷であることがわかります。夢見心地の旋律を届けます。

Ⅱ.作品第肆
春の光が降り注ぐ中、少女たちが花環を作り、縄跳びをする様子を描いています。川面に溢れる光、そよ風に揺れる葦(あし)の葉、そして行行子(よしきり)の鳴き声が、春の息吹を感じさせます。他方、土手の下のうまごやしの原で自分の顔を両掌で覆い、春の光を物憂げに眺める姿は、少女たちの無垢な遊び姿と対照的で、心に残ります。春愁漂う音色をお聴きください。

Lyrics/Program notes

Ⅲ. 作品第拾陸

牛久(うしく)のはての
はるかのはての山脈(やまなみ)の
その山脈からいちだん高く
黒富士(くろ)
大いなる
はるか
黒富士

さくらんぼ色はだんだん沈み
上天(じょうてん)に
金隈取(きんくまどり)の
雲一点

＜存在(そんざい)を超えた無限なもの＞
＜存在に還へる無限なもの＞

祈りの如き
はるか
黒富士

Ⅳ. 作品第拾捌

嗚呼(ああ)

まるで紅色(くれないいろ)の狼火(のろし)のように
豊旗雲(とよはたぐも)は満々(まんまん)と燃え

その下に
　ズーンと黙(もだ)す
　黄銅色(くわうどうしょく)の大存在

まぶしいぬるい光に浮ぶ数数の
豊旗雲の

その下の
　地軸(ちじく)につづく
　黄銅色

どこからか　そして湧きあがる
天の楽音(がくおん)

Ⅴ. 作品第貳拾壹

平野すれすれ
雨雲屏風(びょうぶ)おもたくとざし
その絶端(ぜったん)に
いきなりガッと
夕映の
富士

降りそそぐそそぐ
翠藍(すいらん)ガラスの
大驟雨(だいしゅうう)

Ⅲ.作品第拾陸

はるか遠くからでも周りの山脈を突き抜け、その存在を見せつける「黒富士」が描かれています。そして、<存在を超えた無限なもの><存在に還へる無限なもの>というフレーズは、富士山が単なる山ではなく、超越的な存在、あるいは宇宙的な存在として捉えられていることを示唆しています。富士山への畏敬と祈りを込めて歌います。

Ⅳ.作品第拾捌

富士山の圧倒的なスケールを色彩豊かに描写しています。まるで狼火のような豊旗雲(とよはたぐも)の紅色と、その下にそびえる黄銅色(こうどうしょく)の富士山とのコントラストが印象的です。「地軸につづく黄銅色」の一節は、富士山が地球の中心へとつながっているかのような、壮大なスケールを感じさせます。富士山が聖域であることを暗示するような、神秘的な和音を響かせます。

Ⅴ.作品第貳拾壹

重く垂れ込めた雨雲と、それを突き抜けて現れる富士山の力強さが特徴的な作品です。曇天から夕映えの富士山が突然姿を現したようなダイナミックな表現から始まり、富士山が広大な平野にそびえ立つ雄大さが感じられます。何度も繰り返し歌われる「翠藍ガラスの大驟雨」という表現は、雲間から差す光が日本の隅々まで降り注ぐ様子を、夏のにわか雨のように描写しています。この歌声があなたの心に差し込む光であることを願って。

プログラムノート執筆：鶴 大樹

3rd Stage

萌芽 ～ 一人立つ勇気の種 ～

厚田村

作詞：山本伸一／作曲：杉野泰彦

北海凍る　厚田村
吹雪果てなく　貧しくも
海辺に銀の　家ありき
これぞ栄ある　わが古城

春夏詩情の　厚田川
鰊の波は　日本海
松前藩主の　拓きしか
断崖屏風と　漁村庭

少年動かず　月明かり
伝記と歴史の　書を読みて
紅顔可憐に　涙あり
正義の心の　鼓動楽

痛まし針の　白髪に
不正に勝てと　アツシ織る
母の祈りに　鳳雛も
虹を求めて　天子舞

暖炉に語りし　父もまた
網をつくろい　笑顔皺
権威の風に　丈夫は
征けと一言　父子の譜

厚田の故郷　忘れじと
北風つつみて　美少年
無名の地より　世のために
長途の旅や　馬上行

1954年、池田先生が、恩師・戸田先生と共に北海道・厚田村を訪れた折、師の偉大な生涯に思いを馳せて作られた詩こそ『厚田村』です。この作品は山本伸一の名で作詞され、後に音楽教師をしていた青年が曲をつけ、誕生。今日まで歌い継がれ、親しまれてきました。
1924年、前年には関東大震災が発生し、37万棟もの家屋が被害を受けました。震災から復興していく中、北海道から東京へ一人旅立ち、やがて、広宣流布（仏法が説く生命尊厳の思想を広めること）の大業に生涯を捧げ、人類の幸福と平和の夜明けを開いたのが戸田先生。池田先生は、その清廉にして気高き志を、若き青年たちに受け継ぐため、「世界広布の金の橋を、必ず架けます！」と誓うのでした。師弟がそれぞれの広宣流布に一人立つ“決意”の歌をお届けします。

Lyrics/Program notes

森ヶ崎海岸

作詞：山本伸一／作曲：本田隆美

岸辺(きしべ)に友と　森ヶ崎
磯(いそ)の香(か)高く　波かえし
十九の青春　道まよい
哲学語り　時はすぐ

友は悩めり　貧(まず)しけれ
基督(キリスト)の道　われ行くと
瞳(ひとみ)きびしく　月映(は)えて
つよき鼓動(こどう)に　波寄せり

崩(くず)れし土手に　草深く
いかなる虫か　知らねども
今宵(こよい)は詩歌(しいか)を　つくらんと
楽(がく)　平安の　念(おも)いあり

されども友は　黙(もく)しけん
いかに生きなば　わがいのち
深園(しんえん)の月に　飛びゆかん
涙を拭(ぬぐ)い　悲歎(ひたん)あり

友の孤愁(こしゅう)に　われもまた
無限の願望　人生を
苦しみ開くと　誓(ちか)いしに
友は微笑(ほほえ)み　約しけん

友の求むる　遠き世に
たがうも吾(わ)れは　己(おの)が道
長歌(ちょうか)の舞台　涯(はて)しなく
白髪(しらが)までも　月語る

君に幸(さち)あれ　わが友よ
つぎに会う日は　いつの日か
無言のうちの　離別旅(わかれたび)
銀波ゆれゆく　森ヶ崎

青年よ広布の山を登れ

作詞：山本伸一／作曲：甲斐正人

愛する君たちよ
君らこそ
悠々たる大河の流れだ
この流れは　誰人にも
止めることはできない
いかなる妨げがあろうとも
さらにさらに
水かさを広げながら
海原に向かって
流れていくに違いない
青年とは
希望とは
真実とは
広宣流布という
友のための法戦を
貫きゆくことなのだ

『森ヶ崎海岸』は1947年、当時19歳の池田先生が作った詩に、後年曲がつけられて誕生しました。
戦後間もない時代の混乱期。それまでの価値観が崩れ去った空虚さの中で、東京・大森の森ヶ崎（現在の大田区）に住んでいた若き日の池田先生は、生きるべき「真実の道」を求め、文学や哲学について友人らと学び合っていました。
月の美しいある夜、一人の友人と森ヶ崎の海岸を眺めている時、いかに生きていくべきかを語り合っている中で、キリスト教に入ることを打ち明けられます。池田先生は「身体が弱く生活も苦しいが、人々のために貢献できる、堂々たる人生を開こうと思う。お互いに頑張ろう」と語り、二人はほほえみを交わし合って別れました。
恩師と出会い、真実の仏法の道を歩み出していく、若き日の池田先生の人生に対する“決意”溢れる曲をお届けします。

『青年よ広布の山を登れ』は、1981年に、池田先生が“後継の青年”に託すため発表された、長編詩『青年よ二十一世紀の広布の山を登れ』をもとに、青年と共につくった共戦の歌です。
「青年とは 希望とは 真実とは 広宣流布という 友のための法戦を 貫きゆくことなのだ」という歌詞の通り、その法戦の旗は今、いよいよ21世紀を生きゆく私達の腕に託されました。
池田先生は宗門の迫害に苦しみ抜いた地・大分で、反転攻勢の激闘の中、青年よ立ち上がれと苦闘の同志を激励しました。それこそがまさに法戦です。
「二十一世紀は すべてが君達のものだ！ 君達の暁(あかつき)であり 桧舞台(ひのきぶたい)である！ 君達が存分(ぞんぶん)に活躍しゆく 総仕上げの大舞台である！」との池田先生の言葉を胸に、次は私達が“決意”し、その舞台に一歩踏み出していきます。

プログラムノート執筆：工藤大輝

4th Stage

男声合唱とピアノのための「新しい歌」

作曲：信長貴富

Ⅰ．新しい歌

作詩：フェデリコ・ガルシア・ロルカ／訳詩：長谷川四郎

昼過ぎが言う――影を飲みたい！
月は言う――飲みたいのは星の輝き
澄みきった泉は唇をもとめ
風がもとめるのはため息

匂い　笑い　新しい歌
これがぼくの飲みたいものだ
月だとかユリの花だとか
死んだ愛などから自由な歌だ

あすともなれば一つの歌が
未来の静かな水面をゆさぶり
そのさざ波とぬかるみを
希望でふくらますだろう

光り輝いておちついて
思想に満ちた一つの歌
悲しみや苦しみやまぼろしに
まだよごれていない一つの歌

抒情的な肉体なしに
笑い声で静寂を満たす歌だ
（未知のものへと放たれた
めくらのハトの一群だ）

もろもろの物　もろもろの風
その中心にせまる歌だ
とこしえの心の喜びに
最後にはやすらう歌だ

Ⅱ．うたを　うたう　とき

作詩：まど・みちお

うたを　うたう　とき
わたしは　からだを　ぬぎすてます

からだを　ぬぎすてて
こころ　ひとつに　なります

こころ　ひとつに　なって
かるがる　とんでいくのです

うたが　いきたい　ところへ
うたよりも　はやく

そして
あとから　たどりつく　うたを
やさしく　むかえてあげるのです

Ⅰ. 新しい歌

作曲者・信長貴富氏は、本曲集に込めた思いについて、楽譜のまえがきにこのように記しています。

私が今回の作曲で求めたのはひたすら「うた」だった。合唱曲が、あるいは合唱という媒体が、「うた」としての力を真に持ち得るのかということへ、私なりに挑戦したつもりである。

曲集の初めを飾るのは、スペインの詩人、F・G・ロルカの「うた」です。民俗色豊かな詩や戯曲を書き、ピアノを弾き、歌を歌う彼は、民衆文化の象徴でした。しかし、1936年のスペイン内戦中、フランコ将軍率いるファシストにより銃殺され、38歳という短い人生に幕を閉じました。ロルカにとって「うた」は生き様そのものだったのでしょう。『新しい歌』は、そんな彼の希望と生命力に満ちた「うた」を、光と影が錯綜するような力強い音楽で表現しています。さあ、私たちの『新しい歌』の幕開けです。

Ⅱ. うたを うたう とき

まど・みちおは、日本の詩人です。自然や生き物への深い愛情や人生の哲理を表現する詩風が特徴で、「ぞうさん」をはじめとする、ユーモラスで温かい童謡を数多く作りました。『うたを うたう とき』は、彼の素朴かつ洗練された言葉で、祈りにも似た「うた」への深い慈しみが綴られています。音楽もまた、詩の持つ美しさに寄り添うように、曲集の中で唯一のアカペラ作品になっています。シンプルながらも力強い旋律が、「うた」を歌う人々の祈りを運び、流れていきます。

Ⅲ. きみ歌えよ

作詩：谷川俊太郎

きみ歌えよ
哀しいこと　つらいこと
ひとりで歌えよ
あのひとの名を大声で
歌えば　歌えば　歌えば　ああ
うその涙は出てこない

きみ歌えよ
嬉しいこと　好きなこと
ひとりで歌えよ
バカも卑怯もまるだしで
歌えば　歌えば　歌えば　ああ
ベートーヴェンも友だちさ

きみ歌えよ
きみのこと　洗いざらい
ひとりで歌えよ
こわれたギター抱きしめて
歌えば　歌えば　歌えば　ああ
誰かがいつか耳すます

Ⅳ. 鎮魂歌へのリクエスト

作詩：ラングストン・ヒューズ／訳詩：木島 始

《セント・ルイス・ブルース》を
演(や)ってくれ
死んだら　ぼくのために。
すばらしい　音楽が　欲しいんだ
あそこ　空の高みでは。

《セント・ジェームズ病院(インファーマリ)》を歌ってくれ
ぼくを　埋めるときには――
何故って　そこいらで　ぼくみたいに
いい奴が　置いてけぼりに　されることはない。

Ⅴ. 一詩人の最後の歌

作詩：ハンス・クリスチャン・アンデルセン／訳詩：山室 静

私を高く運んで行け、お前、強い死よ
魂の大きな国へ。
私は神が私に命じた道を進んだ
額をまっすぐにあげて。
私が与えたすべては、神よ、あなたのもの
どれだけ私の富があるのか、私は知りませんでした。
私が費やしたものはほんのわずかです
私は枝の小鳥のように歌っただけです。

さようなら、あざやかに赤い一本一本のばらよ
さようなら、お前、いとしいもの！

ただ私を運んで行け、お前、強い死よ
たとえこの世にあるのが楽しいにせよ！
ありがとう神さま、あなたが与えて下さったもののために
ありがとう、これから来るもののために！
死よ、時間の海を越えて飛んで行け
さあ、永遠の夏の方へ。

（注）傍線の部分は作曲されていない。

Ⅲ. きみ歌えよ
2024年11月に亡くなった大詩人・谷川俊太郎による作詩です。谷川は、屈託のないまっすぐな言葉で私たちに呼びかけます。「哀しいこと、つらいこと、嬉しいこと、好きなこと、洗いざらい歌ってごらん」と。スキップをするかのような「うた」を歌っていると、何だか勇気が、歌う歓びが込み上げてきます。人を勇気づけたいという思いを、明るくポップな「うた」に乗せてお届けします。

Ⅳ. 鎮魂歌へのリクエスト
アパルトヘイト（人種隔離法）による人種差別が激しかった1900年初頭のアメリカに生まれた黒人の詩人、L・ヒューズ。両親の離婚などを経験し、不遇の青少年期を過ごしました。1920年代に黒人芸術が大きく花開くと、彼はそこに生きる道を見出しました。ヒューズのエッセイの中にこんな一文があります。

黒人たちがブルースをつくりあげたんだ。それで今は、みんながそいつを歌う。おれたちは、貧乏で、孤独で、家庭は崩壊し、絶望し、文なしになって、ブルースをつくったんだ

キング牧師が「I have a Dream」の演説をした4年後、1967年に彼はこの世を去ります。黒人差別との激しい戦いと、未来世代の“希望の萌芽”を見届けた彼の人生の傍らには、いつもブルースという「うた」があったのでしょう。鈍く輝く希望のブルースをお届けします。

Ⅴ. 一詩人の最後の歌
H・アンデルセンは、デンマーク・フュン島で、靴職人の夫婦の貧しい家に生まれました。幼い頃から詩を書き、物語をつくり、芝居を演じる、少し風変わりな子どもでした。14歳の時、「有名になる」と決心したアンデルセン。彼は単身でコペンハーゲンに移り、苦労を重ねて、詩人・作家として大成しました。一方で、生涯で幾多の失恋を重ね、結果、独身で最期を迎えることになります。大詩人となった彼は自伝の冒頭で、苦難の多かった人生をこう称しました。

わたしの一生は、美しい童話です

『一詩人の最後の歌』は、そんな彼の辞世の句が綴られています。信心深かった彼は、愛すべき人生を神に感謝し、最後の「うた」を歌い上げます。

プログラムノート執筆：杉尾隆輔

母

生命の源である母。
家族の中心であり、心の支えである母。
私達が何歳になっても、変わらぬ愛を注ぎ続けてくれる母。

母は、いつも私達を温かく包み込んでくれる存在です。

1971年10月4日、池田先生は、偉大な母への感謝を込めて、長編詩『母』を執筆されました。
この詩をもとに、山本伸一の名で作詞、音楽大学出身の松本真理子さん・松原真美さんによって作曲されて誕生したのが、しなの合唱団が一番大切にしている曲『母』です。

『母』の作詞当時、池田先生の母・一(いち)さんは、80歳手前で健康状態もすぐれない状況でした。そうした中にあっても、一さんは常に力強く、優しく、そして慈愛に満ち溢れていました。池田先生は、そんな一さんの姿を、こう綴っています。

戦後、私が夜学に通ったころ、どんなに遅く帰宅しても、母は必ず起きて待っていてくれた。うどんを温めてくれては、「大変だったね。大変だったね」と、決まり文句のように言っていた。

関東大震災によって生活が貧しくなった時。
戦争に息子たちをとられ、長男を失い悲しみにくれた時。
度重なる不幸と災難、その風雪に耐え、なおも温かく家族を支え続けた母。
一さんは、どんな冷たく暗く辛い環境でも、家族に希望を与え、心を照らしてくれる太陽でした。

その偉大な愛は、世界中の母にも重なります。今もなお、世界では争いが絶えず続いています。貧困や飢餓、地球温暖化も解決に至っていません。日本でも東日本大震災や熊本地震、能登半島地震と激甚災害が続き、被災された方々の心の傷は、今なお癒えていません。
不安定な時代だからこそ、人と人との温もり、母のように包み込む愛が、私達の心の拠り所となるのではないでしょうか。

池田先生は『母』の曲について、こう語りました。

音楽は世界共通の言葉である。文化や民族の違いを超えて理解しあえる。そこには平和がある。そして“母”には、人はみな格別の思いがある。ゆえに、私はこの『母』の曲を、世界の全ての母たちに捧げる――

私達しなの合唱団は、この思いを胸に全国、全世界の母へ歌います。あなたの願いが翼となって天空(おおぞら)に舞いくる日まで。

プログラムノート執筆：堀家海舟

母

作詞：山本伸一／作曲：松原真美・松本真理子

母よ　あなたは
なんと不思議な　豊富（ゆたか）な力を
もっているのか
もしも　この世に
あなたがいなければ
還るべき大地を失い
かれらは永遠（とわ）に　放浪（さすら）う

母よ　わが母
風雪に耐え　悲しみの合掌（いのり）を
繰り返した　母よ
あなたの願いが翼となって
天空（おおぞら）に舞いくる日まで
達者にと　祈る

母よ　あなたの
思想と聡明（かしこ）さで　春を願う
地球の上に
平安の楽符（しらべ）を　奏でてほしい
その時　あなたは
人間世紀の母として　生きる

JASRAC 出 2501627-501

Member list

TopTenor
東 伸作
伊藤翔平
大村 清
亀岡真広
佐藤伸一
佐藤正弘
田中正明
濵先誠行
林 孝大 ★
坂西純平
藤代光一
山尾正之 ★
山口正孝
山崎晃義
渡邊竹王

SecondTenor
阿部竜太 ★
池本清史
大岡正勝
太田研一
近藤脩平 ★
杉尾隆輔 ★
鈴木英一
鶴 大樹 ★
永野 宙
菱田光明 ★
堀家海舟 ★
宮瀬 弘 ★
山川裕一 ★
山口治男

Baritone
小川正明 ★
恩徳秀信
柏木 真 ★
工藤大輝 ★
小柴宏徒 /副代表
坂上貴浩
佐藤正夫
清水秀一郎
髙野俊明 ★
津本光一 ★
細田英輝 /団長
本田正男 ★
前田大法 ★
山根大知

Bass
青木晋一
石谷孝太
太田幸一 ★
川口賢二 ★
熊倉 顕 ★
鈴木正彰 ★
大悲山直人 ★
田口亮広
谷 拓宣 ★
中村正俊
福本伸敏
松井明大 ★
山崎伸明 ★

Pianist
加藤大樹

Staff
佐藤敢太
鈴木俊明
関 真悟
高橋一人
寺澤正博
内藤貴城
星 満生 /代表
吉川大地

★定期演奏会実行委員

Links

website　facebook　X（旧 Twitter）　YouTube

[Designed by Yuuki IKEDA]